

29-0850 W113-7

当院における新規オピオイドを中心とした使用動向

○葛西 美保子¹, 下山 律子¹, 菅原 和信¹, 蝦名 正子², 佐藤 哲観²(¹弘前大病院薬,²弘前大医学部麻酔科学教室)

【目的】 これまで癌性疼痛治療においてモルヒネ製剤が中心であったが、近年、経皮吸収型フェンタニル貼付剤、塩酸オキシコドン徐放錠が使用可能となり、薬剤の選択肢が広がり疼痛管理に影響を及ぼしている。そこで今回、当院における最近の癌性疼痛治療に用いられているオピオイドの動向について調査したので報告する。

【方法】 麻薬入院・外来処方せんおよび入院他科外来処方せんについて、平成13年4月～平成16年3月および平成16年4月～12月までの期間について、新規オピオイドを中心に使用状況について様々な角度から比較調査した。

【結果・考察】 平成14年7月に経皮吸収型フェンタニル貼付剤が採用され、その使用の増大とともに硫酸モルヒネ徐放錠の使用量が減少した。また、平成15年8月に塩酸オキシコドン徐放錠が患者限定薬で処方されるようになり、今年度において両薬剤は積極的に使用され、現在増大傾向を示している。さらに、平成16年3月フェンタニル注射剤の癌性疼痛の適用拡大により、使用量がめざましく増加している。

これは、新規オピオイドが使用可能になったことで、内服困難な患者、モルヒネの副作用で増量または使用することのできない患者および比較的軽い癌性疼痛患者においても早期から疼痛管理が容易となったためと考えられる。当院において疼痛管理困難な症例は、麻酔科管理となることが多く、新規オピオイド導入後は麻酔科主導による患者個々のより好ましい疼痛管理のために、オピオイドローテーションが可能になったものと思われる。